8.　外国人に浴衣着装ワークショップを通して「きもの」文化を発信する授業実践とその効果の検証

〇徐智贇(横浜国立大学大学院)、 薩本弥生（横浜国立大学)、川端博子（埼玉大学)、
斉藤秀子（山梨大学)、扇澤美千子（茨城キリスト教大学）

１．目的

近年では、世界的規模の相互依存や社会の国際化が進展している。海外では日本の漫画・アニメなどポップカルチャーへの関心が高まっている。訪日外国人客が年々増加し、海外から日本国内の観光の機会が増えている。しかし、多くの外国人の日本の伝統文化への理解は深くない。外国人にとって、日本理解と文化交流は単なる日本語言語の習得にとどまらず、日本文化を実際に体験することで文化の深層に触れるチャンスとなると考えられる。本研究では「きもの」文化の海外発信方法として外国人が自身で着装をする体験が重要と考え、和服の中で最もカジュアルで着装が比較的容易である浴衣の着装ワークショップを核にした「きもの」文化を発信する教育プログラムを提案し、授業実践がどのような効果をもたらすかを検証することを目的とする。具体的には、以下の三つのことを明らかにする。1 つ目は、外国人の事前の日本の文化への知識や体験の度合いが浴衣着装ワークショップへの意欲に影響を与えると考えられるため、事前の日本文化への知識、あるいは、体験の程度を調査し、それらが浴衣着装学習意欲にどのように影響を与えているかを明らかにする。次に、２つ目は、浴衣着装実践を含むワークショップを通してきもの文化に対する興味が喚起されるかを明らかにする。３つ目は、「きもの文化への興味関心」を高めた外国人は、「日本の他の伝統文化への興味関心」が高まるのか、また、「自国の伝統文化の発信意欲」が高まるのかを検証する。

２．研究方法

2-1 授業実践

対象：2013 年（米国：ポートランド)、2014 年（豪国：シドニー)、2013 年-2015 年（来日外国人対象、三ヵ所)、総計人数：605 名、平均年齢：17.3±4.4 歳

授業実践の概要（表 1)：浴衣着装を核とした授業実践を行った。オプションとして、「きもの」に関する教養・文化面の内容を入れて、興味を高め、きもの文化の深層に触れる内容を模索した。

表 1 授業実践の概要

流れ	導入	展開①	オプション	展開②	まとめ
時間(60-90分)	15-20分	20-30分	10-15分	5-10分	10-15分
内容	レクチャー 事前アンケート	着装示範 着装実践 集合写真	・学内散策 ・ファッションショー ・盆踊り ・茶道体験 ・模様ワーク ・文化面の紹介	畳み方示範 畳み方自習	質問タイム 事後アンケート

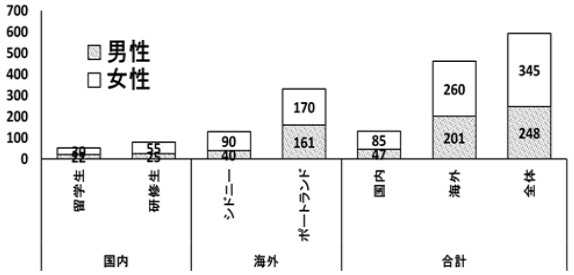

図 1　実践および調査対象者の属性

2-2 アンケート調査

図 1 の調査対象者に着装の前後に着装体験のきもの文化に関わるアンケートを実施した。回収率は 99.2%である。調査対象者を日本に来日したか否かで分け、来日外国人においては半年以上日本に滞在する人は留学生と呼び、一か月未満の滞在は研修生とし、海外においては開催国毎に分類し、今後詳細を分析するが、本報告では、詳細で区別せず、全体傾向のみ報告する。

調査内容について、事前アンケートでは 5 件法で、日本文化の認知・体験度(27 項目)に関して質問し、多重回答でその情報源(10 項目)を複数回答可で質問し、「はい・いいえ」の二択で浴衣・「きもの」についての認知・体験・着装意欲(4 項目)を質問した。「きもの」文化（10 項目）の学習意欲を 5 件法で質問した。事後アンケートでは 5 件法で「きもの」文化に関する興味関心(1 項目)、浴衣の着心地(7 項目)、浴衣着装技能面の興味度(4 項目)・理解度(3 項目) ・習得度(3 項目)、「日本の他の伝統文化への興味関心」、「自国の伝統文化の発信意欲」等の項目(3 項目)を質問した。浴衣着装体験後の着心地と感想(2 項目)等に関して自由記述で質問した。解析は SPSS を用い平均値の差の検定、分散分析、因子分析を行い、AMOS を用いパス解析し因子間の因果関係を調べた。

３．結果及び考察

① 事前調査結果の日本文化の認知度の 27 項目の因子分析を行い 6 因子が抽出され、各々「行事文芸」「ハイテック製品」「和食」「サブカルチャー」「観光買物」「伝統芸能」と命名した。この 6 因子から「事前浴衣の着装学習意欲」との因果関係をパス解析した。「事前の浴衣着装意欲」を高める因子として「サブカルチャー」と「伝統芸能」から有意なパスが引けた。着装意欲を高める要因として海外からでもウェブで情報が得られるサブカルチャーからの影響が大きい。実際の体験は少ないが茶道、華道等の伝統芸能からも着装意欲を高める効果があった。

② 事後調査の着装技能と着心地に関しての項目の因子分析から各々2 因子が抽出され、「理解習得因子」「興味関心因子」と「高揚感」「拘束感」と名付けた。パス解析結果からワークショップの体験が高揚感を高め、着装への興味関心・理解習得意識を高めることを介して、きもの文化への興味関心を高めることが図 2 のように立証された。体験前後の浴衣着装意欲を比較し、事後に着装意欲が有意に高まることが明らかとなった。以上より、着装ワークショップ体験が日本のきもの文化への興味関心を高めることに効果的であるといえる。

③ ワーク実践後に対象者がきもの文化への関心が高まると「きもの文化は素晴らしい」と感じることを介して「日本の他の伝統文化への興味関心」や「自国の伝統文化の発信意欲」が喚起されると仮定しパス解析を行ったところ、図 3 のパス図に示すように仮説が立証された。

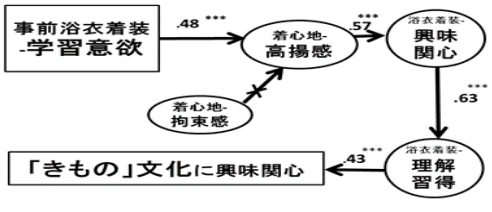

図 2「きもの」文化への興味に及ぼす効果
GFI=.867, AGFI=.830, RMSEA=.093 ＊＊＊P<0.001

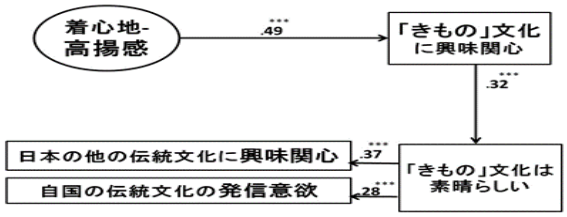

図 3 外国人の伝統文化への意識にもたらす効果
GFI=.953, AGFI=.916, RMSEA=.073 ＊＊＊P<0.001